

研究ノート

東濃方言の推量表現に関する予備的考察

安 藤 智 子

富山大学人文科学研究第 83 号抜刷

2025 年 9 月

東濃方言の推量表現に関する予備的考察

安 藤 智 子

1. はじめに

1.1 本稿のねらい

日本語諸方言において、「行くだろう」のダローのような推量を表わす文法形式は多様であるが、本土方言に広く分布している形式を大きくまとめると、東日本の「イクベー」のように助動詞ベシに由来するもの、西日本の「イクヤロー」のように未然形+助動詞ムに由来するものがある。その分布を国立国語研究所『方言文法全国地図』(The Grammar Atlas of Japanese Dialects: GAJ) の第 237 図「行くだろう」で見ると、ベシ由来は東北・関東地方で優勢であり、新潟県・長野県・山梨県・静岡県以西は九州・四国まで未然形+ム由来が圧倒的である。

ベシ・ム境界の西側すなわち未然形+ム由来側を見ていくと、新潟県は -daroo がつく語形が優勢であり、これはベシ由来優勢の関東にも散見される。ナヤシ方言とも総称される長野県・山梨県・静岡県ではムが脱落したとされる ikura や ikuzura に類する形が多い。この末尾の母音 /a/ は長音化することもあり、ra ないし raa を持つ形は愛知県東部（三河地方）の -dara(a)、岐阜県南部（美濃地方）の -zjara(a)、-jara(a) まで広がっている。さらに、長野県北部や長野・岐阜・愛知・静岡県の県境付近には ra(a) の後に zu がつく形も見られる。

本稿では、こうした境界地域の推量表現のうち、特に未然形+助動詞ム由来のラ（一）とその前後に接続する形態に着目して先行研究を整理し、実態調査を行うべき対象を明確にすることを目的とする。中でも、これまでの調査報告が比較的手薄な岐阜県南東部（東濃地区）の調査を念頭に、その周辺との比較を行う。なお、推量表現として扱う対象は諸研究において幅があるが、本稿では、否定推量、様態、伝聞、意志、可能性判断に属するものは主な考察の対象から外すものとする。

1.2 対象地域

岐阜県内の地域区分は大まかには北部の飛騨地方と南部の美濃地方に分けられる。美濃地方は、西から西濃・岐阜・中濃・東濃と呼ばれる地区に分けられることが多い。本稿で主として扱う東濃地区は、2025 年現在、西部の多治見市・土岐市・瑞浪市、東部の恵那市・中津川市の 5 市から構成されている。

東濃地区の地理的な位置づけは次のとおりである。東濃東部の中津川市は南北に広く、その北部は、飛騨地方の南東部にあたる下呂市と接している。中濃地区の南東部を加茂地区と呼ぶ

ことがあるが、そのうちの加茂郡白川町・東白川村・八百津町、可児郡御嵩町の南東側を東濃地区が囲うように接している。県境を挟んでは、東側に長野県南西部（王滝村、大桑村、南木曾町、阿智村、平谷村、根羽村）、南側に愛知県北東部（豊田市、瀬戸市、春日井市）がある。

東濃東部の馬籠宿から西濃の関ヶ原宿まで、中山道が美濃地方を横断しているが、槇ヶ根追分（現在の恵那市）から東濃西部は名古屋方面へ分岐した下街道（国道19号線）が通る。

2. 東濃地区とその周辺における推量表現形式の分布

本節では、先行研究に見られる推量表現とこれに関連する表現の分布を整理する。

2.1 『口語法分布図』

1903年の調査に基づく国語調査委員会（1906）口語法調査報告書附図『口語法分布図』には、1「書く」、2「受ける」、3「来る」、4「為る」の「未来ノ云ヒ方」の言語地図が示されている。これによれば、岐阜県は2, 3, 4で飛騨地方の白川村と現在の高山市の大部を占める地域が「うけず／うけず」「こーず／こず」「せーず／せず／しず」といった語形でズを用いるとされ、分布図の元となる『口語法調査報告書』では、上二段活用（現代の共通語としては上一段活用）の「起きる」「落ちる」について「飛騨国大野郡地方殊ニ高山町地方」で「起キズ」「落チズ」というとある¹⁾。岐阜県内のこのほかの地域は、1「書こー」、2「うけよー」、3「こー」、4「しよー」（現在の多治見市の辺りおよび郡上市の一部は「しよー」）の地域とされている。すなわち、東濃を含む美濃地方は、標準語の意志形に近いオ段長音で終わる形が報告されている。ここで取り上げられている「未来ノ云ヒ方」は、GAJ第109図「書こう（意志形）」などの「意志形」と最も近く対応するものであり（吉田 2007）²⁾、典型的な推量表現とそのままだ対応するものではないが、少なくとも「未来」の意味としてはズが飛騨地方に偏っているという記述である。

2.2 牛山初男（1954b）

牛山（1954b）は、東海・東山方言の推量助動詞について、1950年代前半に通信によって1市町村4、5名を標準として調査を行い、助動詞ズラ・ダラ・ダラズ・ラ・ツラの分布についてまとめている。

それによれば、まず、ズラは、北信を除く長野県・北都留郡を除く山梨県・静岡県全県・神奈川県小田原市を中心とする地方・愛知県三河地方東部では50%以上の使用率であるという。愛知県三河地方西部および岐阜県恵那郡（おおよそ現在の中津川市・恵那市）では50%以下の使用率であり、岐阜県内のそのほかの地域では、わずかずつの使用が見られるとしている。

次に、ダラの使用域の多くはズラと重なっているが、静岡県の一部、愛知県全域、長野県南

部の下伊那郡では使用率50%以上、長野県では下伊那郡のすぐ北に位置する西筑摩南部（おおよそ現在の本巣郡大滝村・大桑村・上松町・南本巣町）・上伊那郡、北信地域と、岐阜県では益田の南半部（おおよそ現在の下呂市）、恵那郡の全域等で使用率50%以下であるという。

ダラズについては、長野県北信地域と静岡県西部の一部で50%以上であり、50%以下の地域としては長野県、静岡県、愛知県や岐阜県などがあるが、このうち岐阜県では益田郡、恵那郡の南半部にやや広い分布、東濃の土岐、中濃の郡上・武儀・加茂・本巣等に狭い分布があるという。

ラについては、静岡県と山梨県の多くの地域、長野県の南部、愛知県三河地方、岐阜県では益田・恵那・土岐・加茂・武儀・郡上で50%以上の使用率であるとしている。これと比較して、過去推量を表わすツラは広い分布を示すという。静岡県・山梨県・愛知県ではラとほぼ同様であるが、長野県では中南部でツラがラよりも使用率が高い地域がある。岐阜県ではツラが益田・恵那・土岐・武儀・郡上で50%以上の使用率であり、さらに山県・本巣・揖斐で50%以下（ラはこれらの地域で「極めて少い分布」）であるが広く分布しているという。

こうした記述から、東濃地区、とりわけ旧恵那郡に当たる東部では、用法の違いや接続可能な品詞を無視してまとめれば、「口語法分布図」には現れないズラ・ダラ・ダラズ・ラ・ツラという多様な形式が用いられていたとみられる。一方で、東濃地区で現在広く用いられているヤラーなどの形式については、この調査では取り上げられていない。

2.3 江端義夫 (1977)

「あしたは晴れるだろう」という推量表現について、1976年に実施された調査（江端 1977）によれば、ズラやラは長野県・三河地方以東に現れ、岐阜県内では見られない。岐阜県内ではヤローが全体に分布し16地点と優勢であるほか、ジャローが飛騨地方を中心として8地点にまばらに分布し、ローが飛騨東部を中心に4か所、ヤラーは東濃（付知町秋津、多治見市広小路）・中濃（武儀郡板取村上ヶ瀬）の3地点、ダラズが現・恵那市南部の1地点（標準語形のデショーとダローも計3地点）に現れる。

一方、同じ調査において、確認要求の「知っているでしょ」という質問においてラ（シッテルラ、シットルラ）が用いられるか否かという調査項目では、言語地図のプロット位置から推測すると現在の下呂市・白川町あるいは東白川村辺り・中津川市北部（付知町辺りか）・恵那市南部（明智町辺りか）にシットル-ラの使用地点がある。

調査方法や調査時期が異なる牛山（1954b）の調査とは結果も異なり、典型的な推量では、岐阜県内に指定辞に対応する音としてジャ・ヤを持つ地点や、指定辞の後にラでなくローを持つ地点があることが示されたほか、ラが確認要求に限って用いられる地点があるという、意味による分化が明らかにされた。

2.4『方言文法全国地図』(GAJ)

1979～1982年の調査に基づく国立国語研究所『方言文法全国地図』(Grammar Atlas of Japanese Dialects: GAJ)では、共通語の「だろう」に関係する項目のうち、5節で取り上げる第238図「行くのだろう」を除くと、次の地図が挙げられている。

第112図「書くだろう (推量形)」(「あいつは、たぶん手紙を書くだろう」と言うとき)

第113図「来るだろう (推量形)」(「あいつは、明日、たぶん来るだろう」と言うとき)

第114図「するだろう (推量形)」(「あいつは、たぶんその仕事をするだろう」と言うとき)

第237図「行くだろう」(友達から「あの人は今日役場に行くだろうか」と聞かれ、迷いながら「たぶん行くだろう」と答えるとき)

第239図「行っただろう」(友達から「あの人はきのう役場に行っただろうか」と聞かれ、「行っただろう」
と答えるとき)

第240図「雨だろう」(「あしたはたぶん雨だろう」と言うとき)

第142図「高いだろう (推量形)」(「この着物はたぶん高いだろう」と言うとき)

第149図「静かだろう (推量形)」(「あそこは、車が通らないのでたぶん静かだろう」
と言うとき)

東濃地区に該当する調査地点は、次の3地点である。

650907 恵那郡付知町六区桜町 (以下、「付知」)

651909 中津川市駒場西山 (以下、「駒場」)

651990 瑞浪市稲津町小里 (以下、「小里」)

このうち、付知は2005年に中津川市に編入されたが、中津川市中心部の駒場から裏木曾街道(国道256号線、257号線)で23.6kmほど北に位置する山地である。小里は東濃西部の南東に位置する山里である。

上記の質問項目の回答のうち、「だろう」に相当する部分以降を表1にまとめる(以下、Nは無回答。否定疑問形や「かもしれない」等に相当する表現、推量に該当しない表現は省略する)。

表1：GAJ 推量表現「-だろう」／東濃3地点

図	調査項目	付知	駒場	小里
112	書く-だろう	jaroo, zjarazu	jaroo, zura	jaraa
113	来る-だろう	zjarazu	—	jaraa
114	する-だろう	zjarazu	jaroo, raa	jaraa
237	行く-だろう	jarazu-naa	N	jaraa
239	行った-だろう	jarazu	raa	jaraa
240	雨-だろう	N	jaraa	jaraa
142	高い-だろう	zjarazu	raa	jaraa
149	静か-だろう	zjarazu	jaraa	jaraa

また、岐阜県内で東濃に隣接する調査地点は次のとおりであり、「だろう」相当部分以降には表2のような形態が報告されている。

558878 益田郡萩原町萩原上区（現在の下呂市北部；以下「萩原」）

559895 益田郡金山町白山町（現在の白川町；以下「金山」）

650860 武儀郡武儀町中之保若栗（現在の関市東部；以下「若栗」）

651735 各務原市須衛（岐阜地区南部；以下、「各務原」）

表2：GAJ 推量表現「-だろう」／東濃隣接地点

図	調査項目	萩原	金山	若栗	各務原
112	書く-だろう	zjaroo	daroo, jaroo	jaraa	zjaraa
237	行く-だろう	nzjaroo	daroo	zjaroo	zjaraa, jaraa
239	行った-だろう	zjaroo	njaroo	jaro-naa	zjaraa, jaraa
113	来る-だろう	zjaroo	jaroo	jaraa	zjaraa
114	する-だろう	zjaroo	jaroo	jaraa	zjaraa
240	雨-だろう	zjaroo	jaraa	N	zjaraa, jaraa
142	高い-だろう	nzjaroo	daroo, jaroo	jaroo	zjaraa
149	静か-だろう	zjaroo	daroo, jaroo	—	zjaraa

萩原はzjaroo、金山では標準語形と同じdarooに加えてjarooがあり、zjaとjaが混在する付知に地理的に近いが、末尾のzuは現れていない。各務原は小里と同じjaraaもあるが、zjaraaが一貫して現れている。若栗はjaraaが比較的多いが一貫しておらず、周囲に見られる語形が混在している。なお、萩原と金山には、zjaないしjaの前に撥音 /N/ が現れる語形が見られるが、これについては5節で検討する。

なお、岐阜県全体で見れば、ロー類（-ro(o)）／ラー類（-ra(a)）の区分については、表1、2のラー

類の地点を除けば基本的にロー類となっている。また、長野県に多い zura と用言 + raa が現れたのは宿場町の駒場のみで、中山道の影響を窺わせるが、過去推量ツラは確認されていない。

先行調査との比較で言えば、牛山（1954b）が県東部にあるとした dara, daraa は見られない。末尾の zu は牛山（1954b）や江端（1977）において恵那市南部などに報告されているが、GAJ では付知にのみ見られる。

2.5 彦坂（1992, 1994）

彦坂（1992, 1994）は、1985年前後、70歳程度の話者を対象として行われた調査に基づく考察の一部である。詳細な調査地点の地名は不明であるが、岐阜県南部から愛知県にかけて多数の地点のデータが地図に掲載され、各地点で併用される形も多く取り上げられていることから、密度の濃い資料となっている。

それによれば、「明日は晴れるだろう」の推量表現のうち、断定辞（＝指定辞：ダ、ジャ、ヤ）の分布については、愛知県西部にジャが比較的多く現れていることと、東濃南東部にダが現れていることを除けば、おおよそGAJと近い分布が報告されている。ロー類／ラー類の分布については、「通常使うもの」ではない併用形をも取り上げたことにより、GAJでは捉えられていない併用地点が多くあることがわかる。また、ヤラーズ、ダラーズ、（ハレー）ズ等のズが東濃地区に、ズラおよびラが三河地方に多く併用形として報告されている。また、「あそこは静かだったろう」の過去推量では、過去のタの後に断定辞なしでローがつく尾張地方のダッタローのほかは、断定辞の後にロー類・ラー類がつく地点が多いが、ツラも長野県南部から三河地方にかけて多く報告されており、東濃の南東部2地点および中濃の北東部1地点にも見られる。

2.6 『全国方言分布調査』（FPJD）

2010年～2015年にかけて行われた「全国方言分布調査」（Field Research Project to Analyze the Formation Process of Japanese Dialects: FPJD）では、推量表現に関して次の調査項目がある。

G-083 「行くだらう」＝GAJ 第237図の質問項目

G-085 「行っただらう」＝GAJ 第239図の質問項目

G-087 「行かないだらう」（友達から「あの人はきのう役場に行っただらうか」と聞かれ、
迷いながら「たぶん行かないだらう」と答えるとき）

G-120 「先生だらう」（「あの人はたぶん先生だらう」と言うとき）

FPJDでは、東濃地区では次の3か所が調査地点となっている。

中津川市福岡町：GAJの調査地点である付知～駒場の中間地点（以下、「福岡」）

恵那市明智町：東濃東部の最南端に近い町（以下、「明智」）

瑞浪市：GAJの調査地点である小里を含む東濃西部の市（以下、「瑞浪」）

県内で東濃に隣接する地点としては、次の3地点がある。

下呂市萩原町：GAJの調査地点である萩原に同じ

加茂郡白川町：中濃北部（GAJの調査地点である金山を含む。以下、「白川」）

美濃加茂市：GAJの調査地点である若栗に隣接（以下、「美濃加茂」）

FPJDにおける「だろう」に対応する調査項目について、東濃地区の出現形の「だろう」相当部をまとめると、表3のようになる。

表3：FPJD 推量表現「-だろう」／東濃3地点・隣接3地点

		飛騨南東	中濃北部	東濃北部	中濃南部	東濃南部	東濃南東
	調査項目	萩原	白川	福岡	美濃加茂	瑞浪	明智
G-083	行く-だろう	ー	ヤラ、 ラー	ラ	ヤラー	ヤラー	ダラー
G-084	行った-だろう	ンヤロー	ヤロー、 ヤラー	ラー	ヤラー	ヤラー	ダラ
G-087	行かない-だろう	ヤロー ³⁾	ヤラー	ラー、 ヤラー	ヤロー、 ヤラー	ヤラー	ダラー
G-082	先生-だろう	ヤロナー	ヤラー、 ヤロー	ヤラー	ヤラー	ヤラー	ダラー

GAJでは県内に現れなかったダラーが明智町に現れているが、彦坂（1992, 1994）でも明智辺りから東の上矢作あたりにかけての調査地点にダラーがあることから、経年変化というわけではないと考えられる。他の点について江端（1977）・GAJ・彦坂（1992, 1994）と比較すると、東濃においてロー類でなくラー類が依然として優勢である点は変わらないものの、末尾のズは確認されなくなっている。

3. 形態論的解析

表4は、GAJおよびFPJDにおいて当該地域で出現した形式（表1～3）を形態論的に解析し、地点ごとに現れた形式をGAJの表示方式でまとめたものである。質問項目1つのみでの出現については（ ）に入れて示す。

表4：GAJ (=G)・FPJD (=F) における出現形式の形態素ごとの比較／東濃・隣接地点

	地点 G/F	指定辞	ラム由来	-ズ	終助詞
飛騨南東部	萩原 G	zja, Nzja	roo		
	萩原 F	ja, (Nja)	roo, (ro)		(naa)
中濃北部	金山 G	ja, da, (Nja)	roo, (raa)		
	白川 F	ja, (∅)	raa, roo, (ra)		
東濃北部	付知 G	zja, ja	ra, (roo)	zu	(naa)
	福岡 F	∅, ja	raa, (ra)		
東濃東部	駒場 G	ja, ∅, (zu)	raa, roo, (ra)		
東濃南東部	明智 F	da	raa, (ra)		
東濃南部	小里 G	ja	raa		
	瑞浪 F	ja	raa		
中濃南部	若栗 G	ja, (zja)	raa, roo, (ro)		(naa)
	美濃加茂 F	ja	raa, (roo)		
岐阜地区南部	各務原 G	zja, ja	raa		

次節から、表4の指定辞、ラム由来形式、未然形に接続する-ズの区分を軸に、他の先行研究から得られる語形と合わせて、その出自とともに検討する。次節以降で由來說を示すとおり、darooなどの形式は、断定の助動詞ナリの連用形ニ＋接続助詞テ＋補助動詞アリの未然形アラ＋推量の助動詞ムに由来し、ニ-テ-アラ-ムという構成を持つが、ここではニ-テ-アに由来する現代の指定辞と、未然形ラ-ムに由来する推量の要素に区分している。なお、用言終止形につく助動詞ラムに由来する形式も、未然形ラ-助動詞ムと合わせてラム由来の形式としておく。

3.1 指定辞

指定辞のダの由来は、断定の助動詞ナリの連用形ニ＋接続助詞テ＋補助動詞アリからなるニテアリ>デアリ>デア>ダと変化したものとされる（『日本国語大辞典 第二版』以下、『日国』：「だ」[助動]）。

表4にまとめた指定辞の項目では、daは中濃北部の金山と東濃南東部の明智に現れている。山田（2017: 417）にまとめられた岐阜県の方言資料で、推量表現の指定辞でダが確実に現れるのは、明智の東に位置する上矢作、愛知県との県境を成す木曽川の中州の川島町（現在の各務原市南西部）の資料のみである。断定としての指定辞ダも県内では限定的であり、いずれも東西分布するダ／ジャ・ヤの境界線に近い位置に現れていることから、東日本方言のダと連続しているものと考えられる。

次に、指定辞zjaとjaの由来としては、上記ダの成立段階にあるデアから上方でジャ（ヂャ）が生じたものであり、そこからさらに変化した形がヤとされる（『日国』「だ」[助動]）⁴⁾。

推量表現の指定辞が *zja* の地域は、GAJ の時点では東濃の付知のほか、萩原、各務原、若栗がある。山田（2017）による方言資料のまとめによれば、ジャラズが金山（中濃北部）、丹生川（飛騨東部）の記述に見られ、ジャラーが八百津（加茂地区、瑞浪市の北）に見られるなど、時期によっては様々な地域で用いられたことが窺える。FPJD では東濃にジャはなくなり、ヤに移行しているとみられる。

推量表現において指定辞が $\emptyset$ （ゼロ）となるのは、動詞の後が助動詞ラム由来の場合である。地域は表4の範囲では現中津川市（福岡、駒場）と白川町のみだが、長野県と愛知県北東部、山梨県、静岡県にも見られる。このラムは、元来は指定辞を挟まず用言に直接接続するものであるので、指定辞 $\emptyset$ の形態はより古いものであると考えられる。山田（2017: 416）は「書クロー」「書クラー」といった形が「後に異分析によって生じた「ダロー」「ヤロー」に取って代わられた」と説明している。

なお、指定辞が $\emptyset$ で形容詞に接続する場合については、GAJ において東濃地区では駒場の *takai- $\emptyset$ -raa* のみである。しかし、カリ活用未然形＋推量の助動詞ムに由来する形としては、GAJ で飛騨地方に *takakaroo* があるほか、彦坂（1994: 100）、山田（2017: 417）等の資料にヨカラズ、ヨカラーズといった語形が見られるとおり、末尾にズ（3.3 節）を伴う形が飛騨・中濃・東濃に存在する。

指定辞の欄のズについては、検討が必要である。長野県飯田方言についての柴田（1953: 380f）の記述をはじめ、用言＋ラとズラを併用する地域についていくつかの先行研究が「～だろう」がラ、「～のだろう」がズラに相当することを指摘し、船木（2006: 141）は「つまり準体機能が推量表現の中に含みこまれた形式を対立項として持っているのである」と述べている。

しかし、体言を述語とする推量にはズが必要（雨ズラ、*雨ラ）であることから、ズラ＝「のだろう」と単純化することはできない。大西（2016: 138）においては、前の要素が用言であっても準体法すなわち体言相当の場合にズラとなるという趣旨の説明がなされている。ズラとラを用いる地域は「行くのだ」が「イクダ」（「行く」の準体法＋ダ）となる地域と重なることをふまえると、「行く」：「のだろう」＝イク：ズラではなく、「行くの」：「だろう」＝イク（準体法）：ズラということになる。

ズラの由来については諸説あるとされるなかで⁵⁾、『日国』（「ずら」[助動]）では「推量の「ずろう（ずらう）」の変化したもの」と説明されている。ズラウ＜推量ウズ＋推量ラムであり、ズラ後部のラはラムに由来すると考えられるが、前部のズの元のウズは、用言の未然形に接続する推量の助動詞ム＋助詞ト＋動詞スからなるムズの転じたものである。しかし、未然形に接続するはずのムトスラムがズラの由来であるという説では、ズラが体言に接続していることの説明がつかない。このことは上条（1959）や大西（2016）が指摘しており、無論、用言の準体法（連体形）につくことの説明にもならない。

そこで上条（1959）は、ズラのズが山梨県奈良田（現在の南巨摩郡早川町）では /du/ であること等の根拠をもとに、山田（1934: 49）の「「づら」は「づ」と「ら」との複合語であり、「づ」は指定の「だ」と関係があることを示してゐるのではないかと思はれる」との説を支持している。大西（2016）も同様の考えで、古代東国方言の断定辞（指定辞）ドーが、頻繁に前節する動詞連体形末尾の /u/ に順行同化して、奈良田では /du/ となり、/zu/-/du/ の対立を持たない他の地域では /zu/ となったものとして、「ズラの中に断定の助動詞（断定辞）「だ」に該当するものが含まれていることが想定される」（大西 2016: 139）としている。

上条（1959）は、「ちゃ系統」の指定辞から「づら」が生じたとするが、それならなぜ「ちゃろう」などでなく「づら」になったのかという問題について、ズラと地域的に重なりより広い分布を持つ過去推量ツラ<完了ツ+推量ラム（例：イッツラ「行っただろう」）に類推的に引かれたものとみており、ツラへの類推という点では大西（2016）も同様の見方をしている。

指定辞に当たるツが東国方言のドーからの変化であるとしても、ジャに由来するとしても、指定辞の持つ有声子音の要素を保存しつつ、推量の機能でツラへの類推を起こしたとすれば、ズラは自然な変化の結果の候補の一つと考えられる⁶⁾。本稿ではこの考察を取り入れて、表4ではraの前のzuを指定辞の欄に入れ、このズを指定辞に相当するものとみておく。

3.2 ラムに由来する形式

表4から、推量系のモダリティを表わす形態として指定辞に後続するラム由来の要素は、東濃地区では基本的にラー類優勢であると言える。これは隣接する長野県南西部・愛知県北東部でも同じである。ロー類は、東濃では北部・東部で一部に現れるのみだが、岐阜県内で隣接する飛騨地方や中濃地区では多く見られる。

形態上は、両者ともに未然形ラ+助動詞ムあるいは助動詞ラムから生じたものと考えられるが、山田（2017: 416）の「ヤラ（一）」の項の説明によれば、ヤローの母音はラムの連母音auがo:となったものであるのに対し、ヤラはauのuが脱落したものであるという。彦坂（1992: 63）も、ダラーについてオ段長音の開音からではなく、「ウズ類から来たもの」とみている。この「ウズ類」のズについては次節で扱う。

3.3 未然形に接続するズ

未然形の後に生じるズは、『口語法分布図』の「未来ノ云ヒ方」としては飛騨地方に分布している。東條（1949: 163）はこれを未来助辞と呼び、「行かむとす（推量の助動詞ム+助詞ト+動詞ス）>行かむず>行かうず>行かーず>行かず」という成立過程を推定している。

その分布については、牛山（1954a）の調査によれば、岐阜県内では飛騨地方から郡上・武儀（「武儀」の誤りか）・加茂でイカズモが用いられており、恵那郡・加茂郡・武儀郡（「武儀

郡」の誤りか)で広く、本巣・揖斐・不破・養老・吉城・益田・土岐の諸郡でも一部でイカズが用いられるとされている。ただし、この調査は「明日天気なら山へ行かず(行コウの意)」等の文に関するもので、推量ではなく意志表現を調べたものと考えられる。

奥村(1976: 273)は、東濃地区の意志表現として明智で未然形+ズ、加子母(現在の中津川市北部)で未然形+ス/シの例があるとしたうえで、「もっとも、東美濃地方では、『ズ』が推量表現、ス(又はシ)が意志表現」というような区別の存するところもかなりある」と記述している。また、飛騨地方および中濃地区の板取・美濃にも「推量(意志)法」で「行カズ」があるとしている。このほか、山田(2017: 417)でも、東濃・中濃・飛騨の各地で形容詞未然形+ズが単独で推量を表わすとみられる資料が挙げられている。

GAJでは、意志形の第106図「起きよう」、第107図「開けよう」、第108図「寝よう」、第109図「書こう」、第110図「来よう」、第111図「しよう」ではzuやsu、siは岐阜県内に現れないが、第232図「[行こう]と思っている」では、助詞トに先行する意志形として、ikasu、ikasiなどのsu、siを持つ形が飛騨東部の上宝・高山塩屋、飛騨南部の萩原、東濃北部の付知、東濃西部の小里、中濃の美山・若栗に現れている。2.4節で見た推量の形式のいずれかにズが現れるのは、東濃北部の付知のほか、県内では飛騨北部の河合(図113「来るだろう」のみ)と、飛騨東部の高山塩屋・高根である。こうした分布と奥村(1976)の記述から、GAJでは、動詞が助詞トに先行することの多い意志形として現れることから無声化してsu、siとなり⁷⁾、その地域の一部では、形容詞などの状態性の述語を中心にzuが推量として現れたと推察される。2.4節で見た彦坂(1992, 1994)でも、この推量のズが東濃地区南東部に現れている。

これに対し、FPJDでは、岐阜県内では推量表現としても意志表現としてもズは現れていない。

4. 意味論的検討

前節までに検討した先行研究のデータから、東濃地区周辺では推量表現としてロー類とラー類があり、東濃ではラー類が優勢であることを見た。また、指定辞の有無と種類についての分布を確認した。本節では、これらの形態と意味の関係について、先行研究を検討する。

奥村(1976)では、「東美濃」(東濃地区)の推量表現としてヤロ・ジャロ・ヤラ・ラ・ズ・ズラ・マイ・シコウヤの諸形を挙げたうえで、次のように述べている⁸⁾。

前記諸形の間には、極めてデリケートな用法差が認められ、例えば、ヤラという語はヤロー・ジャロー等よりやや確実な推量を表わし、ラはそれより更に確実な推量で念を押す場合に用いる。(奥村1976: 263)

また、加子母・土岐辺りではヤラにズがつくという特殊な形がみられる。(中略)これらはかなり確信的な感じの推量表現であり、ヤラよりもやや強い口調に聞える。(奥村1976: 272)

すなわち、確実性もしくは確信度の点で、ラ・ヤラーズ⁹⁾ > ヤラ > ヤロー・ジャローという階層があるという見方である。ここには、三つの観点での階層関係が含まれていることになる。

一つ目として、ヤラーズとヤラとの関係である。ヤラーズは形態上はGAJにおける付知の *zjarazu* と対応する。意味用法の違いという点で言えば、ヤラを意志等に用いる記述が認められないのに対して、未然形＋ズ（ス／シ）は推量のほか、意志、反語とみられる記述がある（奥村 1976、山田 2017）。ヤラーズ／ジャラズといった複合形態の持つ意味の範囲は未詳であるが、奥村（1976: 272）の挙げる次の2文は推量であると考えられる。

アシタリハ雨が降ルヤラーズ（加子母）

アレモ本を読むヤラーズ（土岐）

ヤラーズ、ジャラズとヤラの確信度あるいは意味機能の違いを確認するための調査を行いたいところではあるが、岐阜県内においてはGAJの調査時点でも推量でのズの出現地点が少ないうえ、近年の調査（FPJD）で末尾のズが現れる回答が得られていないことから、意味的な違いに関する調査が成立する可能性は低いかもしれない。

二つ目に、指定辞のない用言＋ラが指定辞のある形に比べて確実であり、「念を押す場合に用い」られるという指摘である。「念を押す」というのは、確認要求を指しているとも考えられる。ラとズラに関しても、ラのほうが確信度が高いといった指摘があるが、程度の問題ではなく、確認要求や説明推量などの意味用法の違いとして捉えられる可能性については5.3節で検討する。

三つ目に、確実さの程度がラー類 > ロー類という点である。これに関して、2.3節で見たとおり江端（1977）は、確認要求でのみラー類が用いられる地点があることを指摘している。また、山田（2017: 416）は「両形が併用される地域では、「ヤロ」は推量に、「ヤラ」は確認要求にと、使い分けられることもある」としており、二つ目の観点である指定辞の有無と同様に、程度の問題ではない用法の違いが指摘されている。

関連して、白岩（2022）は、愛知県岡崎市方言の「ダラ」、静岡県静岡市方言の「ラ」、神奈川県茅ヶ崎市方言の「べ」の3つの推量形式を取りあげ、それぞれの用法が若年層（昭和末生まれ）において限定されてきていることを指摘している。これによれば、いずれも確認要求や文末に単独で生起する推量では若年層でも「使う」と答えるのに対して、疑い（Yes-No 疑問文・WH 疑問文）、従属節内の推量、終助詞ナと共に生起する推量では、若年層で使用・許容度が下がっている。さらに、許容度が下がった用法では、「方言形の推量形式は使えないが、標準語形のダロウなら使えるという内省」が若年層話者から得られているという（白岩 2022: 69）。標準語のダロウの用法の比重が推量から確認要求へと変化しているという指摘（土岐 2002）があるが、これと並行的に、しかし方言形は標準語より急速に、推量形式の機能が確認要求に移行していることになる。

この白岩(2011)と山田(2017)の指摘を合わせると、次のような仮説が立てられる。ヤラ(一)が分布する東濃地区において、方言形であるヤラ(一)が確認要求に比重を移し、方言形指定辞ヤ+標準語推量ローからなるヤロ(一)が標準語に近いネオ方言として推量を担うようになっているという仮説である。ただし、FPJDの推量表現でも文末ではラー類が優勢であることから、完全にラー類、少なくともヤラーが確認要求に移行したということは考えられない。

この仮説は、2000年生まれの中津川市方言(旧中津川町)話者の内省に基づく野田(2025: 59)に、動詞の推量形として「従属節内や終助詞を接続する場合は「ヤロ」を用い、「ヤラ」「ラ」は使えない」とあることから、東濃東部において当てはまる属性があることが窺える。

また、東濃西部の多治見市方言を母方言とする筆者(1972年生まれ)の内省でも、次に文法性判断を示すように、確認要求でヤラーの許容度が高いことは確かであるように思われる。一方、推量のいくつかの用法では、ヤラーとヤローの使用条件について検討する必要がある(例文参考: 白岩 2011)。

- ・ 疑い(Yes-No疑問文) 明日は雨 {*ヤラー／ヤロー} か。
- ・ 疑い(WH疑問文) 明日の天気はどう {*ヤラー／ヤロー}。
- ・ 推量(従属節内) 明日は雨 {ヤラー／ヤロー} デ、傘持って行キヤー。
- ・ 推量(従属節内) たぶん明日は雨 {ヤラー／ヤロー} と思う。
- ・ 推量(終助詞との共起) たぶん明日は雨 {?ヤラー／ヤロー} な。
- ・ 推量(文末単独生起) たぶん明日は雨 {ヤラー／*ヤロー}。
- ・ 命題確認要求 これ、あんたのペン {ヤラー／*ヤロー}。
- ・ 知識確認要求 ホレ、あそこにポストがある {ヤラー／*ヤロー}。あそこの角を…
- ・ 知識確認要求 しょうがない {ヤラー／*ヤロー}。仕事なんヤデ。

この点については、地点・世代差を含めての調査が必要となる。

5. 説明推量

本節では、共通語においてノダ形式と推量表現が共起する「行くのだろう」のような説明推量に対応する方言形式について検討する。

3.1節で見たように、ノダの形式を持たない(「行くのだ」が「行くダ」となる)方言地域とラ・ズラ併用地域は重なっており、そこでは「～だろう」がラ、「～のだろう」がズラに相当することが指摘されている。

しかし、東濃地区ではノダ形式の出現が限定的でありながら、ズラの用いられる地域も少なく、ヤラ等がズラに対応する機能を持つのかどうかも明らかではない。この地域で「行くのだろう」に当たる意味がどのように表されるのかは興味深いところであるが、現在のところ詳細なデータは得られていない。ここでは、周辺地域についての先行研究をまとめておく。

5.1 準体助詞と準体法

古典語において、活用語の連体形が体言に準ずる働きをする用法は準体法と呼ばれている。準体法は室町時代から江戸時代にかけて次第に用いられなくなり、準体助詞ノを句末に付けることが求められるようになったとされる(青木 2014)が、これは中央語の話である。彦坂 (2006b) は、地域によってノのほかなどが分布する準体助詞の発達段階を次のようにまとめている。

- a. 連体格：格助詞の連体格用法 (例：GAJ 第13図「おれの手拭」)
- b. 連体格的準体助詞：連体格に続く体言を省略する場合 (例：「この手ぬぐいはおれのだ」)
- c. 代名詞的用法 (方言の例：b例が地域によって「…おれのだ」等となる場合の下線部)
- d. 活用語括り：活用語を承け形式的な体言化用法 (例：「行くのは良いが…」)
- e. 接続・述語成分形成：接続助詞ノデ・ノニ、断定文ノダなど機能語の一部に関与

彦坂 (2006b) によれば、体言につく a, b の用法は上代からと古く、近世に c が生じたと考えられ、c の古い例としては、「せんどそちへわたいたのは…… (虎明本)」(江戸時代初期) という用言に接続する文が挙げられている。＜モノ＞や＜ヒト＞を表わす b, c の用法から、d のように用言について＜コト＞を表わす用法、さらに機能語に取り込まれて文法化した e の用法が派生したものと考えられる。ノダ文はこの最終段階の e に含まれる。

用言を体言化する際に、全国的には準体助詞がつくこの新しい形式が用いられる地域が多いが、準体助詞がつかない古い準体法が用いられている地域もある。これを彦坂 (2006a) は零準体助詞型と呼び、その典型として「行くダ」等の分布を『全国方言資料』を基にまとめている。それによれば、「北陸・新潟県を除く中部地方、関東周辺地域、島根・鳥取県付近」に零準体助詞型が分布し、岐阜県 (地点としては郡上郡白鳥町) も長野県・静岡県・愛知県三河地方ほどの高率ではないもののここに含まれている。

共通語で用言＋準体助詞に対応するいくつかの項目については、GAJで分布を見ることができ。紙幅の関係で詳細は割愛するが、ここでも、岐阜県内では、愛知、長野、静岡に比べると準体助詞のない形式の分布は少ないものの、項目や地域によって用いられることがあり、彦坂 (2006a) がまとめた「行くダ」以外の例でも、零準体助詞型の性質を持つと言える。GAJ の調査項目のうち、ノダに推量表現がついた第238図については、次節で考察する。

5.2 説明推量の形式の分布

GAJでは、2.4節で見た第237図「行くだろう」のほかに、第238図「行くのだろう」の調査項目がある。共通語で準体助詞の有無が対立するこの2項目について地点ごとに比較する。

第237図 行くだろう (友達から「あの人は今日役場に行くだろうか」と聞かれ、迷いながら「たぶん行くだろう」と答えるとき)

第238図 行くのだろう（道を歩いている人を見て、友達から「あの人はどこへ行くのだろうか」と聞かれ、「役場に行くのだろう」と答えるとき）

表5：GAJ 第237図「行くだろう」・第238図「行くのだろう」／東濃周辺・海津

地区	地点	第237図 -だろう	第238図 -のだろう
飛騨南東部	萩原	nzjaroo	zjaroo
中濃北部	金山	daroo	nzjaroo
東濃北部	付知	jarazu-naa	jarazu
東濃東部	駒場	N	raa
東濃南部	小里	jaraa	jaraa
中濃南部	若栗	zjaroo	nojarazuna
岐阜地区南部	各務原	zjaraa, jaraa	nzjaraa, njaraa
西濃南部	海津	N	zjaro

まず、GAJ第238図「行くのだろう」を観察する。岐阜県内では「のだろう」に当たる部分として、nzjaroo、njaroo、nzjaraa、njaraa、nzjaraazuといったNを持つ地点が多く、飛騨西部の白川村1地点でnajarooにnaが見られる。これに対し、抜粋して表5に示したうちの県東部4地点（萩原・付知・駒場・小里）と海津の1地点では、準体助詞相当の要素が見られない。第238図「行くのだろう」で準体助詞を持たない県東部4地点のうち、東濃の3地点は「行くだろう」「行くのだろう」が同形である。残る1地点の萩原は、第237図「行くだろう」でNを持っており、共通語とはNの現れ方が対称的である。

なお、零準体助詞型とされる長野県や静岡県でも、GAJでは、第237図「～だろう」がraで代238図「～のだろう」がzuraという関係は、さほど明確に表れてはいない。第237図のほうでraの出現地点が多く、第238図ではnzuraなどのようにNを持つ形も見られるものの、第237図、第238図ともにzuraとraを併用する地域もある。愛知県三河地方では237図、238図ともにdaraが優勢だが、第237図でraが現れる地点や、第238図でzuraが現れる地点がある。

次に、FPJDから得られるデータを観察する。FPJDでは、GAJの第237図（行くだろう）、第238図（行くのだろう）、第239図（行っただろう）と同じ項目（G-083, 084, 085）に加えて、G-086「行っただろう」（役場の封筒を持って歩いている人を見て、友達から「あの人はどこへ行っただろうか」と聞かれ「役場に行っただろう」と答えるとき）も調査項目に取り入れられている。

その結果を抜粋してまとめた表6のうち、海津ではGAJ（表5）と異なり、「ン」が現れている。GAJの調査地点になかった明智のG-086「行っただろう」については、イッタンダラーのほか、長野県などに見られるイッツラーが現れている。他の県東部の地点（萩原・白川・福岡・瑞浪）では、GAJの調査地点と同様に、基本的に「行くだろう」「行くのだろう」に対応する準体助

詞の有無に関しては違いがない。このうち萩原はG-084、086だけでなくG-085でもンが現れている。なお、白川では準体助詞相当の要素はないものの、微妙な違いがあり、これが何を意味するのかは現時点では不明である。

表6：FPJD G-083～086「行く／行った＋（の）だろう」／東濃周辺・海津

		G-083	G-084	G-085	G-086
地区	地点	-だろう	-のだろう	-ただろう	-たのだろう
飛騨南東部	萩原	—	ンヤロー	ンヤロー	ンヤロー
中濃北部	白川	ヤラ、ラー	ヤラー	ヤロー、ヤラー	ヤラー
東濃北部	福岡	ラ	ラー	ラー	ラー
東濃南東部	明智	ダラー	ダラー	ダラ	ンダラー、 ツツラー
東濃南部	瑞浪	ヤラー	ヤラー	ヤラー	ヤラー
中濃南部	美濃加茂	ヤラー	ンヤロー、 ンヤラー	ヤロー、ヤラー	ンヤロー、 ンヤラー
西濃南部	海津	ヤロー	ンヤロー	ヤロー	ンヤロー

大まかにまとめると、県内ではGAJにおいて説明推量の準体助詞を持たなかった地域のうち、西濃南部の海津でのみFPJDでは準体助詞を持つ回答が得られており、東濃の各地点では、明智の過去推量を除き、GAJでもFPJDでも説明推量か否かが共通語に対応するような相違をもたらしていないと言える。なお、FPJDの各項目の備考欄を見ると、次のような注記が見られ、各地点で推量表現における準体助詞の有無による区別がない、もしくはあいまいであることが確認されている¹⁰⁾。

G-084 白川 〈イカシルンヤラーのように「ン」を入れては言わない〉

福岡 〈ンは入らない。イカッセルンヤラーとは言わない〉

明智 〈この場合イクンダラーは使わない〉¹¹⁾

瑞浪 〈「イクンヤラー」とは言わない〉

G-085 萩原 〈必ず「ン」が入る〉

G-086 白川 〈「ン」を入れては言わない〉

福岡 〈イカシタンヤラーは？〉

瑞浪 〈「イッタンヤラー」とは言わない〉

FPJDでは、県境を越えると、ズラが優勢な長野県南部ではG-083 イクズラ、G-084 イクンズラ、G-085 イツツラ、G-086 イッタンズラのように区別して、準体助詞を分析的に表現する地点が多く見られる。ダラーが優勢な愛知県三河地方ではG-083：084＝ダラー：ンダラー、G-085：086＝タダラー：タンダラーのように区別する地点もあれば、東濃と同様に準体助詞の有無が

区別されない地点もある。船木（2017）によれば、この愛知県側のダラ類が静岡県に伝播する過程で、静岡県の「だろう」相当のラ類と「のだろう」相当のズラ・ダラ類という対立関係が消失し、ズラ類が準体助詞に後接するようになっているという。

5.3 ラ／指定辞＋ラ

東濃地区について、奥村（1976）がラのほうが指定辞ヤ／ジャ＋ラよりも「確実な推量」であると述べていることは4節で紹介したが、指定辞＋ラとみられるズラ（3.1節参照）とラが用いられる方言についても、やはりラのほうに「確実」「確信」とする記述が見られる。一例として柴田（1976: 95）は、静岡・山梨・長野県などにおいて「ラのほうが推量でも、確信を持つてする推量であるのに対して、ズラは確信のない推量と考えられる」と確信度の違いを指摘し、前者を「確実推量」、後者を「不確実推量」と呼んでいる。

これに対し、江端（1977: 94）は、中部方言について、確実性の違いにも触れつつも、「両者の相違点は、「ズラ」が、未来的、抽象的ことならについての推量が特色であるのに対し、「ラ」は、概して現実的、具象的存在についての確認推量が特色である」と述べている。挙げられているラの例文には他の用法も含まれるが、2.3節で見た「知っているでしょ」の調査結果と合わせて、「確認推量」は確認要求を指し、明確な用法の違いを指摘していると言える。

ラの確信度が高いということと確認要求であるということは、働きかけに言及しているかどうかの違いはあるが、話者の心的状況としては同じ方向性を持つ。確信度か確認要求かという見解の違いは、対象地域や調査時期の違いによる可能性もあるが、地域・時期が違って同じ出自を持つ語形が何らかの共通性を持っていると仮定すれば、研究の蓄積および進展による解像度の違いという面もあると考えられる。

では、確認要求がラ、説明推量がズラであると言えるだろうか。例えば共通語で「青い顔をして、体調が悪いんだらう？早退したら？」といった場合、ノダロウが説明推量と確認要求の用法を併せ持つことからわかるように、確認要求であるということと説明推量であるということは、非両立関係ではない。さらに、そのどちらでもない純粋な推量をどう表すかという問題もある。そうだとすると、対象の地域において確認要求／非確認要求、説明推量／非説明推量といった用法の違いを軸に整理する必要があるだろう。

現時点での資料では、岐阜県内では指定辞のないラーが現れる駒場（GAJ）・福岡（FPJD）において、ラ／ズラについて指摘されてきたような説明推量に対応する語形の区別は確認されていない。その区別がないのだとすると、東濃地区のラーとヤラの違いが確認要求／非確認要求といった用法の違いに帰せられる可能性も含めて、調査が必要である。

6. まとめと今後の調査の課題

本稿では、先行研究におけるデータをもとに、東濃地区を中心とした推量表現の分布を観察した。その結果、次の項目が、今後の調査が必要かつ可能な実現可能性のある項目として挙げられる：(1) バリエーションのある東濃北部・東部の語形の分布、(2) ヤラー使用地域におけるヤローの用法の確認、(3) 説明推量の用法に対応する語形。

(3) に関して、彦坂 (2006a) は、準体助詞を用いる中央語を「分析的・対象化させた表現志向を取る」とし、準体助詞なしに指定辞が用言につく形式を持つ方言を「地域社会の中でそれほど論理的表現を必要としなかった方言」であり「文脈志向型」であるとしている。しかし、準体助詞を用いない方言の中でも、ラ／ズラで「だろう」／「のだろう」の区別を担ってきた方言は、彦坂の言う「対象化させた」「論理的表現」ができることになる。これに対して、明智を除く東濃地区には真にその区別がないとすると、こうした方言こそが、より「文脈志向型」の表現形式を持つということになるのかもしれない。

ただし、他県における調査では、ズラからダラへの変化 (江端 1977、大西 2014 他)、静岡県ではズラからラへの変化等 (井上 2022) といった様々な変化が報告されている。また、FPJDにおいて愛知県三河地方ではダラー：ンダラーといった分析的な形式が多く見られるように、現在、東濃地区でも共通語などの影響からか「イクンヤラー」などの言い方は頻繁に観察され、より分析的な語形が用いられるようになっていていると考えられる。こうした中で、船木 (2007) などを参考に、より注意深い調査を行う必要がある¹²⁾。

参考文献

- 青木博史 (2014) 「準体句」日本語文法学会『日本語文法事典』198-199 大修館書店
 井上史雄 (2022) 「静岡の新方言と標準語の普及過程」静岡大学言語学研究会『静言論叢』5: 1-27
 牛山初男 (1954a) 「未来助辞「ず」の分布について」信濃教育会『信濃教育』808: 30-36
 牛山初男 (1954b) 「推量助動詞「ずら」「ら」等の分布」信濃郷土研究会編『信濃』6(6): 387-392
 江端義夫 (1977) 「中部地方域方言の推量表現の分布について」国語学会『国語学』110: 98-84
 大西拓一郎 (2014) 「＜共同研究プロジェクト紹介＞帰還形：方言の形成過程解明のための全国方言調査 方言分布の変化をとらえた！」『国語研プロジェクトレビュー』5(2): 68-77
 大西拓一郎 (2016) 『ことばの地理学－方言はなぜそこにあるのか』大修館書店
 奥村三雄 (1976) 『岐阜県方言の研究』大衆書房
 上条馨 (1959) 「「づら考」…その成立の由来と分布」山梨方言研究会『山梨方言論文集』1: 28-40
 国語調査委員会 (1906) 『口語法調査報告書』/ 附図『口語法分布図』国定教科書共同販売所
 国立国語研究所 (1966-1974) 『日本言語地図』大蔵省印刷局
 国立国語研究所 (1989-2006) 『方言文法全国地図』大蔵省印刷局
 国立国語研究所共同研究プロジェクト (2010-2015) 『全国方言分布調査』調査結果
https://www2.ninjal.ac.jp/hogen/dp/fpjd/fpjd_index.html (2025 年 3 月 DL)
 柴田武 (1953) 「方言調査法」東條操編『日本方言学』吉川弘文館 367-433
 柴田武 (1976) 「第二部 標準語と方言」柴田武編『朝日小事典 現代日本語』朝日新聞社 62-118

- 白岩広行 (2011) 「方言の推量形式における意味変化：談話的機能へ」『阪大日本語研究』 23: 57-77
- 東條操 (1949) 『方言の研究』 刀江書院
- 土岐留美江 (2002) 「『だろ』の確認要求の用法について—江戸時代後期と現代における様相の比較—」
近代語研究会編『日本近代語研究 3』 ひつじ書房 183-200
- 日本国語大辞典第二版編集委員会・小学館国語辞典編集部編 (2003) 『日本国語大辞典 第二版』 小学館
- 日本放送協会編 (1966-1967) 『全国方言資料 第1巻～第5巻』 日本放送協会
- 野田太暉 (2025) 「岐阜県中津川市方言」方言文法研究会編『全国方言文法辞典資料集 (9) 活用体系 (7)』
55-59
- 彦坂佳宣 (1992) 「東海西部地方の推量辞をめぐる—愛知県方言の分布と歴史ノート (8) —」『名古屋・
方言研究会会報』 9: 55-65
- 彦坂佳宣 (1994) 「東海西部地方における推量辞の分布と歴史」『国語学』 179: (13)-(25)
- 彦坂佳宣 (2006a) 「『行くダ』などの言い方をする方言群とその性格」『名古屋・方言研究会会報』 23:
1-11
- 彦坂佳宣 (2006b) 「準体助詞の全国分布とその成立経緯」『日本語の研究』 2(4): 61-75
- 船木礼子 (2006) 「推量表現」大西拓一郎編『方言文法調査ガイドブック 2』 (2002-2005 年度科学研究費
基盤研究 (B) 「方言における文法形式の成立と変化の過程に関する研究」) 137-160
- 船木礼子 (2007) 「推量とその分布」『日本語学』 明治書院 26(11): 148-155
- 船木礼子 (2017) 「推量表現形式の分布とその変化—地域共通形式への収斂と脱推量形式化」大西拓一郎
編『空間と時間の中の方言』 朝倉書店 106-127
- 山口幸洋 (1987) 『静岡県の方言』 静岡新聞社
- 山田敏弘 (2017) 『岐阜県方言辞典』 岐阜大学
- 山田正紀 (1934) 『山梨県方言の諸相』 (資料編) 山梨言語地理學會
- 吉田雅子 (2007) 「『口語法分布図』と『方言文法全国地図』」『日本語学』 明治書院 26(11): 44-56

謝辞

本研究はJSPS 科研費 JP24K03919 の助成を受けたものである。

注

- 1) 吉田 (2007) 等が指摘するように、『口語法分布図』と『口語法調査報告書』には齟齬が見られる箇所がある。また、『口語法分布図』では一定の地域を一つの語形で代表させて表す方式を採用しているため、それぞれの地方における語形の混在や細かな語形のバリエーションは読み取れない。『口語法調査報告書』にはより詳しい語形の分布が示されているが、本稿での紹介は割愛する。
- 2) 吉田 (2007: 55) では、『口語法分布図』の「未来ノ云ヒ方」と『方言文法全国地図』(GAJ) の意志形について、「完全一致するとは一概に言えないが、意味表現としては重なり語形も同じものが現れていることから、同項目と判断した」としている。
- 3) 萩原では未然形+否定推量のマイを持つイカマイモもあるが、本稿では否定推量専用の形態マイは分析の対象外とする。他は否定辞ンまたはヘンに表3掲載の形態が接続している。
- 4) 文末の指定辞としては、『日本言語地図』第46図「<いい天気>だ」(1966年)では岐阜県内ほぼ全域でZYA [d^(d)3a] が優勢であったところから、FPJD の G-021「先生だ」ではや優勢に置き換わっている。
- 5) 後述する上条 (1959) のほか、彦坂 (1994) でも先行研究における見解が紹介されている。
- 6) 山口 (1987) では、静岡県等において撥音便をとる動詞+ツラが「死んズラ」、否定過去+ツラが「～ナンズラ」のようになることが記述されている。こうした現象もズラという形態の発生に影響をおよぼ

している可能性が考えられる。

- 7) 例えばアラーズ、アラスカ（ともに「あるものか」の意の反語）といった形で東濃地区の高齢層で聞かれることがあり、その際もカが付けば無声化が生じる。
- 8) 「マイ」は注3) にもあるとおり、否定推量を表わす。山田（2017: 418）によれば、「シコウヤ」のシコは「趣向」の音が変化したもので、元来は「工夫を凝らした身なり」「趣のある恰好」を指す名詞であり、この原義に由来する視覚情報による推定（様態）から伝聞にも使われる文法形式として発展したものである。奥村（1976: 272）はシコウヤを「他地域のラシイやヨウヤに該当する語」としている。
- 9) 奥村（1976: 272）は「ヤラにズがつくという特殊な形」と述べているが、語形の例ではヤラズではなくヤラズと記述されている。ラとヤラ（一）ズの関係については記述がない。
- 10) このほか、県西部の垂井町でも、G-083「行くだろう」に「ン」を入れる話者があり、「ン」のない語形は誘導によって「ようやく出てきた」という。
- 11) < G-052 との整合性がなく疑問あり。G-052（出したなら〈そろそろ届くはずだ〉）も最初ダイタナラと言いダイタンナラと言い直している。ゆれがあるとしか考えられない。G-084 については確認済みである>との注記も付けられている。
- 12) 船木（2007: 152）が指摘するように、GAJ・FPJD の「行くだろう」と「行くのだろう」の質問文では、文脈の捉え方によって意図した単純推量と説明推量の差が明確にならない可能性があり、こうした結果がすべての地点（対象者）において調査意図のとおり回答されたものであるとは断言できない。それでも、長野県南部のようにその差がある地域においては違いが出ていることから、東濃地区周辺においては現在もこの区別がない地点がある可能性はあると言える。調査文を精選したうえで調査を行う必要があろう。